大谷瑩誠と神田喜一郎と

礪波　護　(教授・東洋史学)

大谷大学図書館所蔵の資料と私の研究との関係について一文を草するようにとのこと。両晋から隋唐五代に至る中国の政治社会史と宗教史の分野で研究を続けるとともに、近年は、我が国における明治以降の東洋学の成立と発展の過程にすこぶる関心をもって論稿を発表してきた私にとって、本学所蔵資料の中では、大谷瑩誠(1878～1948)旧蔵にかかる蔵書・中国古印・古硯のコレクションである「禿庵文庫」とりわけ「宋拓墨宝二種」と、神田喜一郎(1897～1984)旧蔵の和漢洋にわたる善本「神田鬯盦博士寄贈図書」いわゆる「神田コレクション」とがとりわけ有難い。

二十代後半から五十代半ばにいたる、前後25年間にわたって私が勤務した京都大学人文科学研究所は、こと漢籍に関しては日本有数の蔵書を誇り、それぞれ上下二巨冊からなる同研究所の『漢籍分類目録』と『漢籍目録』とは、中国学に従事する研究者や学生にとって、きわめて有益な工具書として知られる。しかしながら同研究所蔵の貴重書善本の目録あるいは図録は発行されていない。その蒐書方針が、前身の東方文化学院京都研究所の創立当初から、学問的実証的研究に必要有益な書物をできるかぎり完備し、古板本や稀覯本はむしろ二の次にするという方向で一貫してきたために、そもそも貴重書や善本に該当する漢籍は少ないからである。

ところが大谷大学図書館には、有縁の方々によって次々と寄贈されたコレクションも多く、目映いばかりの厖大な貴重書や善本が収蔵されていて、幾種類もの貴重書善本図録が編集刊行されてきた。たとえば、親鸞聖人の七百回御遠忌記念事業の一つとして、図書館の建物(最近改装して〈至誠館〉と命名された旧図書館)が新築された際の竣工式の日、あたかも大谷大学の近代化六十周年記念日たる1961(昭和36)年10月13日、に刊行された『大谷大学図書館善本聚英』や、蓮如上人の五百回御遠忌に合わせて1998(平成10)年春に出版された、『大谷大学図書館所蔵貴重書善本図録―仏書篇―』を挙げうる。

本学に私が赴任してから早くも二年、教室での講義や演習には、18世紀前半の京都の地で上梓された、近衛家熙校訂本『大唐六典』全30巻と伊藤東涯撰『制度通』全13巻を取り上げるとともに、拓本の写真を活用しつつ、唐代の宗教石刻史料を精読してきた。そして学外の学術誌などに、かなりの論著を編集し執筆してきたのである。

2002(平成14)年中に公刊した文章を月を追って挙げていくと、一月に「魏徴撰の李密墓誌銘」(『東方学』第103輯)、三月に随想「内藤湖南の欧州紀行」(内藤湖南顕彰会編『湖南』第22号)、五月には『京大東洋学の百年』(京都大学学術出版会刊)を藤井譲治と共編して、「内藤湖南」と「宮崎市定の生涯」の両章を担当し、九月には「中国の天神・雷神と日本の天神信仰」(『日本歴史』第652号)を執筆するとともに、私家版『平岡武夫遺文集』(中央公論事業出版制作)を編集し、十二月に「羅・王の東渡と敦煌学の創始」(高田時雄編『草創期の敦煌学』知泉書館刊)を出した。また口頭発表としては、十一月二十

三日に史跡足利学校で釋奠記念講演を引受け、「唐代の釋奠」と銘打つ講演を行った（足利市教育委員会より、『平成十四年度足利学校釋奠記念講演筆記』の題で、三月に発行予定)。これらの執筆や講演の準備段階で、内藤湖南（1866～1934）に近しかった、大谷と神田の旧蔵コレクションにも関心を寄せたのである。

大谷瑩誠は、1944（昭和19）年より戦後の1948（昭和23）年にいたる激動期に本学学長を勤めた方で、東本願寺の連枝であった。その十七回忌の法要が1964年春に大学の講堂で営まれた際、「大谷瑩誠先生と東洋学」と題する記念講演をしたのが神田喜一郎で、講演録が増訂版『敦煌学五十年』(筑摩叢書、1970年）に収録されている（当然のことに、1960年初版の二玄社版には未収録)。

神田は、夙くから大谷の懇情にあずかったのは、恩師であった内藤湖南、狩野君山が大谷と懇意であったからである、として話を進める。そして明治末から大正初にかけては、中国の学問が京都で非常な勢をもって勃興してきた時代であった。辛亥革命がおこり、その大動乱を避けて、中国から羅振玉と王国維という偉い学者が京都へ移住したが、内藤と狩野は、もともとこの二人の学者とは旧知の間柄でもあり、互いに提携して新しい中国の学問を提唱した。その新しい学問の一つに、敦煌学というものがある、と述べたのち、

> 大谷先生は、この敦煌学によほど御興味をお持ちになったのでありましょう。今日、この大谷大学に御寄贈になって「禿庵文庫」の名のもとに保存せられております先生の御遺書を拝見いたしますと、この敦煌学関係の書物が非常に多いのであります。ことに、敦煌学のおこりました初期の書物は、殆どみな備っているように存じます。

と感心している。

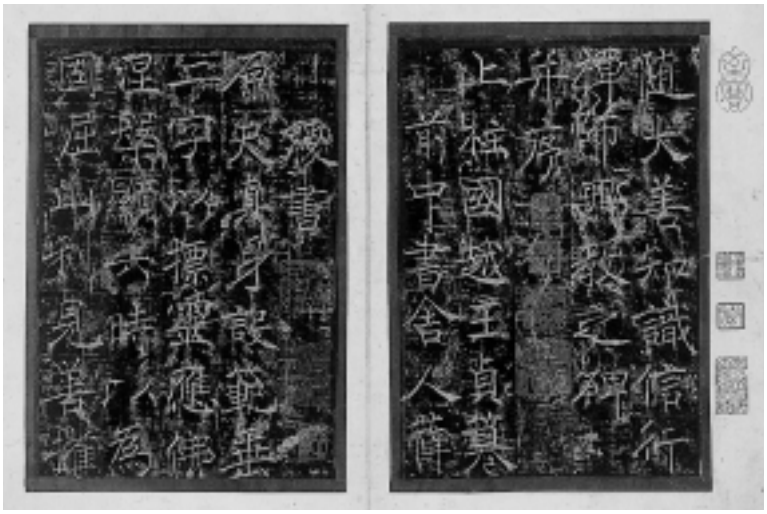
神田は、羅振玉や王国維、また内藤湖南がとくに力を注いだ学問に金石学というのがあり、大谷がこの学問にもよほど興味を感じたと見え、「禿庵文庫」の中には、この金石学に関する書物が際立って多いことに注目している。中国の金石学は、西洋のエピグラフィ、つまり碑銘学のことであるが、エピグラフィとは少しちがう点があり、金石に書かれている銘文の内容は勿論のこと、銘文の文字そのものを美術的な見地からも研究する、つまり書道の学問にまで発展するのであって、大谷は金石学の中でも、とくにこの方面にだんだん深く研究を進めたようである、と神田は指摘したのち、

> 今日、先生の御遺書の中には、中国の書道史の上で昔から有名な唐の欧陽詢の「化度寺塔銘」とか、また唐代に王羲之の字を集めて刻した「大唐三蔵聖教序」の古い拓本があります。これらは、いずれも宋時代に拓せられたもので、中国でも珍しいものでありますが、そのほかにもう一つ、唐の薛稷という書家の書きました「信行禅師碑」の宋拓本があります。これは、今日まったく他に存在せない天下唯一の拓本でありますのみならず、その信行禅師というのは隋の時代に三階教と申します一宗を開いた人で、中国の仏教史の資料としても貴重な価値をもっているものであります。

と、実に見事な紹介をしている。

大谷瑩誠はこのような国宝的な価値をもった拓本のみならず、厖大な中国の古印を蒐集した。これは中国の古印のコレクションとして、世界有数のもので、その中心となっているのは羅振玉が日本に携えてきたもの。古印の中にはいろんな当時の官職の名前を刻した官印が沢山あり、官制の研究など、学問上の資料として活用するようになったが、その権威が羅振玉なのであった。

「禿庵文庫」の遺贈をうけた本学は、それら書籍や文物の中から、貴重な善本や優品を選んで、『中国古印図録』『宋拓墨宝二種』や『禿庵文庫本　選択本願念仏集』『中国古硯図録』といった豪華な解説付きの図録を次々と



宋拓 信行禅師興教之碑　越王貞撰 薛稷書
(『宋拓墨宝二種』所収)

世に問うてきた。なかでも1967(昭和42)年刊の『宋拓墨宝二種』は、私の上司であった平岡武夫が『大谷学報』で書評し、

　これはもっとも入念の書物である。収めるものは宋拓の二碑。信行禅師興教碑はこれ一つが残る天下の孤本であり、化度寺舎利塔碑は唐楷最上の神品である。印刷は、最高のできばえである。用紙もインクも実に効果をあげている。九百年昔の格調と墨光が、機械印刷でここまで再現できるとは思い及ばなかった。

という絶賛の言葉で書きおこし、

　この墨宝を護持された禿庵上人にわたくしは心から敬意を表する。そしてこのすぐれた複製をされた大谷大学に感謝を惜しまない。ただし実のところ、この書物はわたくしたちには入手困難である。望ましいことは、大谷大学にだけ犠牲を負わせることなしに、この種類の書物を、もっと容易に、それを求めるものに分かつことができる体制が樹立されることである。

という文章で締めくくっている。

　コロタイプ多色刷とはいえ、本書の頒価は二万三千円。平岡教授でさえ此の如し。月給が三万数千円であった助手の私にはもちろん高嶺の花。35年の歳月を閲し、本学図書館に残部があるのを知って、元の頒価で購入し、永年の渇を癒したことである。

　神田喜一郎の遺贈にかかる「神田鬯盦博士寄贈図書」については、1988(昭和63)年秋に『善本書影』と『目録』が同時に刊行された。『善本書影』の編集に際しては、依頼されて私も洋書二冊の解説を執筆した。ニュウホフ『東インド会社派遣中国使節紀行』と、キルヒャー『中国図説』で、ともにラテン語版だったので、フランス語版を参照しつつ苦労して執筆したのを懐かしく思い出す。

　そののち1994(平成6)年10月には、新たに図書館からカラー図版を満載した特別展観図録『神田コレクションの世界』が刊行された。今回、足利学校で「唐代の釋奠」講演を行うに当たり、徳川家康が1600(慶長5)年に足利学校庠主であった圓光寺の閑室元佶に開版させた木活字印本、いわゆる伏見版『貞観政要』の神田本の現物を閲覧させていただいた。

　『貴重書善本図録―仏書篇―』と対になる、仏書以外の図録を鶴首して擱筆しよう。